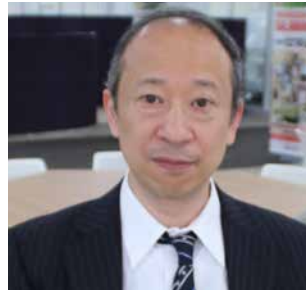


東海大学

現在、長期、中期、短期の留学プログラムが59コースを用意されており、目的と興味・関心に応じて選択できます。今回はワシントンD.C.への中期インターンシッププログラムと、モスクワ大学への短期交換留学プログラムを紹介します。



■ 吉川祐介 さん



■ 宮崎啓 先生



■ 萩原夏花 さん

近年はどの大学でもグローバル人材育成に力を入れています。その中で、外国語教育は重要な役割を果たすと思いますが、東海大学ではどのような外国語教育を行っているのでしょうか。



■ 宮崎先生

東海大学には国際教育センターが設置されており、ほぼすべての外国語授業の実施と外国語に関する研究を行っています。外国語を教える教員のほとんどが当センターに所属し、約半数がネイティブ教員です。センターが提供する必修の英語コミュニケーション科目は1、2年次生で必ず履修しなければならない、授業はすべて英語で進行。もちろん、習熟度別クラスになっていますから、学力向上を図るため

各教員が様々な工夫を凝らして授業を行っています。

東海大学の特徴と言えるのは、学生個々に対する丁寧なフィードバック体制でしょうか。例えば授業の主体は情報のインプットとアウトプットの関係を基に、リーディングとライティング、そしてリスニングとスピーキングを各セットにし、総合的にコミュニケーション能力を向上させていくためにどうすれば良いかを細かく項目別に評価し、きちんとデータに基づいて指導していきます。それを各学生へ示しながら効率よく教育します。

■ 吉川さん

すべて英語で行われる授業は、自分にとってすごく大事だと思っています。ネイティブの先生に対してどうすれば伝わるのかを考え、努力する習慣が身に着きますね。ただ、授業についていくのは大変なので、予習は欠かせません。

■ 萩原さん

でも、けっこう楽しいですよ。宮崎先生がおっしゃる通り、先生方が工夫を凝らして下さって、先生によって理論も授業の雰囲気も違うので「こんなふうに言えば伝わるんだ」という新しい発見が

あって学びが深まります。また、授業を離れたところでも常に英語に触れられる環境で、例えば課題の提出で研究室を訪れるときも英語でインタラクションできるようにして下さるのが私にとってはとても貴重な経験でした。

■宮崎先生

国際教育センターは2016年4月から英語教育部門、国際言語教育部門、国際教育部門、留学生教育支援部門の4つの部門構成となりました。海外派遣留学プログラムや各国の学生に向けた研修受入れといった、いわゆる本学が有する様々な受入・派遣プログラムの企画・運営をしているのも当センターです。日本人も留学生も快適に学べる環境の整備を目指しているのです。新設した Global AGORA では、「ラーニング・コモンズ」として留学生を含む学生同士が楽しく交流しています。

そんな中、東海大学の留学にはどんな特徴があるのでしょうか。



■宮崎先生

東海大学は早くから国際教育に取り組んでおり、留学も40年前から各国複数の大学と協定留学制度を運営してきた歴史があります。特に、当時はヨーロッパの北欧エリアやロシア（当時はソ連）に留学拠点を持つ大学が少なく、そのような国との交流も東海大学の特徴のひとつだったと言えるでしょう。もちろん同時にアメリカや中国な

ども拠点を持ち、英語圏に限らず幅広い地域で多文化教養を得る理念が早くから根付いていました。

現在はさらに拠点を広げ、留学先は20ヵ国。長期・中期・短期の留学プログラムは合計59コース（※「海外派遣留学プログラム2017」パンフレット内の数字参照）用意しており、大きく分けると「派遣留学プログラム」「交換留学プログラム」その他「インターンシッププログラム」「ボランティア研修プログラム」などがあります。毎年300名前後の学生を海外に送り出しています。人気が高いのは、中期で3ヵ月ほど滞在するカナダのブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）です。こちらは語学研修プログラムですが、学生にとってはホームステイが魅力的なようで、身近な環境で異文化に触れつつ語学もしっかり学べると人気が高いのでしょう。また、お勧めしたいのがハワイ東海インターナショナルカレッジ（HTIC）。こちらは長期と短期があり、いずれも先鋭のネイティブ教員のもと、英語力をしっかり伸ばすことに特化した非常に内容の濃いプログラムです。特に長期は、日本の「学士」とアメリカの「短期大学士」の2つの学位：ダブルディグリーの取得が可能なプログラムのため、卒業後の進路として海外の大学への進学や海外勤務など選択の幅が広がります。吉川さんが参加したモスクワ大学（MSU）のプログラムも人気がありますよね。

■吉川さん

昨年は15人、今年は10人参加しています。

■宮崎先生

留学プログラムは、基本的には夏季出発・冬季出発の2種類ですが、萩原さんのようにアメリカのセメスター制度（春学期・秋学期）に合わせて出発したり、大学の夏休みや春休みでの参加も可能なプログラムなど、自身の大学生活に組み込みやすい種類を選択できるようになっています。

お二人の留学先での学びについて教えてください。

■吉川さん

僕は昨年と今年の2回、短期（約4週間）の交換留学プログラムでMSUに行きました。工学部ということもあり、語学にそこまで興味がなかったわけではないのですが、東海大学に入学してからずいぶん多彩な留学プログラムがあるのだなと気づき、そこから学習意欲が湧きました。ロシア語を始めたのはただの気まぐれでしたが、学び始めると名詞や動詞の語形変化が複雑で奥が深い。いっそのこと、もっと習得してみたいと思いついたのが留学の動機です。

滞在中はMSUの寮で生活し、MSU内のロシア語を学ぶ専用校舎で授業を受けるかたわら実地研修として、美術館を巡るなど生活文化に触れる機会も得られました。



吉川さんは交換留学でモスクワ大学に

■萩原さん

私は中期（約4ヵ月）のワシントンセンター（TWC）インターンシッププログラムでアメリカのワシントンD.C.に行きました。このプログラムは、昼間は企業でインターンシップ、夜はアカデミックコース（授業）という、内容の濃いものです。私はもともと、将来は観光に携わる仕事に就きたいという夢があって観光学部を選んでいたので、派遣先は観光の研究を行うNGOを希望しました。そちらに研究補助員として配属されたのですが、“インターンシップ＝参加型”という言葉



ワシントンD.C.での萩原さんの様子

を強く意識できた体験でした。日本のインターンシップは仕事をちょっと“体験”して、雰囲気味わうだけのイメージですが、アメリカでは“参加型”で、会社の重要な経営会議に参加させてもらい意見を求められることもありました。意欲を見ればより業務を与えてくれ、裁量が大きくとてもやりがいを感じました。

■宮崎先生

二人ともきっかけはどうあれ、希望先に留学することができて良かったですね。東海大学としては留学を、大きな可能性を広げる出発点であると位置付けています。出発点の先は、必ずしも就職でなくてもいい。自身の人生を切り拓いていくための知識や教養、そして忍耐力や問題解決能力といった様々なファクターを学んでほしいという想いがあります。ですから、なるべく大勢の学生が留学できるよう多彩な応募条件を用意しているのです。吉川さんの場合は交換留学ですから、授業料や宿泊費は免除されています。

一方、萩原さんの場合は奨学金を利用しており、奨学金はほぼ全てのプログラムに対して支給しています。ただ奨学金はGPA（Grade Point Average）に基づいた成績評価基準対象者に限られますから、かなり厳しい選考になります。さらにインターンシッププログラムは事前に英語の履歴書や英語の電話面接等も必要ですから、事前準備が大変だったでしょう？

■萩原さん

そうですね。実は、最初はインターンシッププログラムではなく語学を磨けるスタンダードな留学プログラムを考えていたのですが、ネイティブの先生の必修科目を受講していく中でコミュニケーション能力の伸びを実感できたのです。また、大学で楽しく英語力を向上していくE.S.S.サークル

に所属し、そこで留学生と毎日交流を持つ中で、生きた英会話を習得する術はもしかしたら大学より違う場所のほうがいいのではという考えも芽生えて。それで最終的にインターンシッププログラムを選択しましたが、実際に留学をしてみると自分の考えを100%英語にできず、伝えることの難しさを痛感したのも事実です。あっという間の4ヵ月間は、ネイティブの人たちと同じ速度で仕事ができないことへの葛藤の毎日で、今はただ何もトラブルがなく終わることができて本当に良かったと胸を撫で下ろしています。

■宮崎先生

頑張っていたようですが、息抜きはしましたか？

■萩原さん

寮でルームシェアしていたアメリカ人学生たちと4人でニューヨークへ旅行しました。交通機関からホテルの予約まですべてコーディネートしてくれて、私にとっては大きなりフレッシュになりました。そのときの友人とは、今も毎日連絡を取り合っています。

■吉川さん

僕も連絡を取り合っていますね。ロシア人の友人に、現地の就職事情なども聞けるので「海外で働く」というイメージがしやすくなり、知見が広がります。

実際に留学して、自身の考え方に変化はありましたか？

■萩原さん

留学中にいつも考えていたのは、自分の置かれている環境によってどのような考え方を持つかということです。プログラムには各国から300名程度の学生が集まり、そのうち8～9割がアメリカ人学生で、残りが他国。さらに東海岸エリアは日本人にとって馴染みが薄く、自身がマイノリティ視されていると強く感じていたのです。そのような立場に置かれても意見を求められたとき、こういった言動が適切であるのか。日本で送る日常生活では、当然自分はマジョリティとなり居心地のいい空間に居ることが多いので、周囲の人たちと違うものを持っているときの視点を考えるようになりました。



■吉川さん

僕は大きく分けて2つあり、1つ目は異文化適応力ですね。ロシアは想像通りと言えそうですが、とにかく寒くて食べ物がイマイチ。食事は寮の食堂やカフェで摂っていたのですが、どれも安いが粗悪で、肉の中身が半煮え状態ということも多々ありました。日本のような整った環境から異国のタフな環境に身を置くことでバイタリティが身に着きますから、これも留学経験の良い点だと思っています。そして2つ目は、こうしたアウェーの文化を肌で感じたからこそ日本の優れた文化を再認識できたことです。例えば、すでに日本の技術力は世界中で評価されていますが、自分が日本に居るときは改めて考えたりしません。ですが、ロシアの人たちから褒められたり、実際に滞在して比較することで自国の良さを実感することができました。

■宮崎先生

留学から自分たちなりの学びや考え方を見直すことができたのは、非常に素晴らしいことです。今は留学経験があるというだけで就職時のアピール材料になるわけではありません。企業がグローバルな活躍ができる人材を求めていることは確かですが、大切なのは留学経験から何を得、どのような能力を培い、そして、さらに一歩進んで今の国際社会における日本の問題点・疑問点を持つこと

です。留学終了後は学生全員が帰国報告書を提出するので、留学経験から自ら課した問題解決のプロセスを分析していくわけです。私たち教員はそこから問題解決能力がいかに養われているかを判断していきます。クリエイティブな発想ができるか、そのような想いを自分なりにうまくプレゼンできるかどうか今後の社会生活では重要になってきますからね。

■萩原さん

日本の問題点という意味では、参加したインターンシッププログラムを通して企業での“働き方”そのものを考えるいいきっかけにもなりました。留学する前は日本で就職することが当たり前と思っていたのですが、いざアメリカの企業文化に触れてみるとしっかりワーク・ライフ・バランスの意識が根付いていて、働きやすさを感じたのです。日本では今、労働時間を含めた勤務体制がいろいろ問題になっており、これから改善されていくのだと思いますが、アメリカと日本で働くそれぞれのアドバンテージを比較できたことは自分の将来にとって実りのある経験でした。

■宮崎先生

留学から帰国してきた学生は、みんな自信をつけて帰ってくるので喜ばしい限りですね。根拠をもって意見を述べることができるし、表情が豊かになっていると思います。

留学をするために事前にしておいたほうがいいこと、あるいは留学する人に伝えておきたいことはありますか？

■先生

私は英語の教員ですが、敢えていうなら語学のみならず一般教養を身に着けてほしいですね。特に世界諸地域の歴史や社会に関しては重要だと思っていて、これは、高校生はもとより学校の先生や保護者の方へのメッセージでもあります。例えばハワイに留学して、パールハーバー（真珠湾）を見学したとします。パールハーバーと言えば、太平洋戦争で多大な被害があった場所です。ですから現地の人々にとっては、とても神聖でいわばお墓のような場所なのです。そこで観光気分の学生が騒いでいるのは、気持ちのいいものではありません。やはり、訪れる国に関しては長きに渡る歴史を把握しておくべきだし、私たち大人がしっかり学生に教えていかなければならないことでしょう。これもグローバル人材を育む重要な要素です。

■萩原さん

もし可能であれば、高校生のうちから日本語ではない違う言語に触れ合う環境に身を置くことができたらいいですね。それが無理でも、下手でもいいからどんどん授業で英語を使ってほしいです。日本人はどうしても英語を話して間違えると萎縮してしまいがちですが、そんなことは気にしない意識を肌感覚で身に着けてもらえると一番いいのですけどね。

■吉川さん

僕は少し物質的なことですが、留学希望があるなら金銭面の情報に敏感になっておくのが良いと思います。その時の為替レートによって出費は大きく変動してきますから日本円やドルの価値がどうなっているのかを確認する。留学先の買い物で失敗している僕の友達もいますから、知識を養っておいて損はないはずです。

最後に、留学に興味を持っている高校生へメッセージをお願いします。

■吉川さん

留学というとどうしても文系というイメージですが、東海大学の良いところは文系・理系関係なくチャンスがあるということ。応募条件が幅広いので理系の学生でも思い立ったらぜひ留学をしてほしいです。

■萩原さん

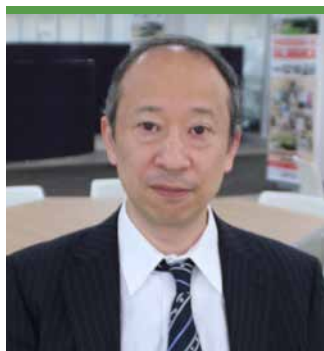
私は東海大学の付属高校出身なので、当時から大学の豊富な留学プログラムを知っていてそんな環

境で学びたいと思ったのが入学したきっかけでした。ですから、大学をどこに行こうか迷っている高校生もいると思いますけど、4年間で何を学びたいのかを考えて選んでください。中でも東海大学は留学プログラムが充実していて、ただ留学に行って終わりではなくあらゆる側面でのサポート体制がしっかりしています。東海大学で得た留学経験の学びは、必ずその後に生きてくると実感できました。

■宮崎先生

東海大学の留学プログラムは非常に教育的なパッケージになっています。留学中に身に着けた国際感覚や語学力は、私たち教員が必ずバックアップして学生個々の能力に繋げます。また、安心して留学できるよう危機管理対策も万全を期しています。ぜひ東海大学の留学制度で視野を広げていただきたいです。

●インタビューに答えていただいた方々●



■宮崎啓先生

東海大学国際教育センター教授
私立桜美林高等学校出身。東海大学文学部英文学科卒業。東海大学大学院博士課程修了。ハワイ州立大学大学院修了。慶應義塾高等学校教諭、慶應義塾大学外国語教育研究センター副所長を経て、現東海大学国際センター教授、次長。大学英語教育学会テストングワークショップ講師も務める。



■吉川祐介さん

東海大学工学部機密工学科4年次生（2017年4月取材当時）
群馬県立伊勢崎高等学校出身。東海大学留学プログラムで短期留学を2回利用し、ロシアのモスクワへ。異国のタフな環境に身を置くことで、自国の良さを改めて実感。滞在中は美術館を巡るなど生活文化にも触れる経験をする。



■萩原夏花さん

東海大学観光学部観光学科4年次生（2017年4月取材当時）
私立東海大学付属浦安高等学校出身。昨年度、東海大学のインターンシッププログラムを利用し、アメリカのワシントンD.Cへ留学。観光の研究を行うNGOで研究員として携わり、貴重な4ヶ月間を経験。